

阿弥陀寺（あみだじ） 脇浜町2丁目



阿弥陀寺は浄土宗知恩院の末寺で山号を栽松山という。本尊は阿弥陀如来・勢至菩薩・観音菩薩の三身一体の仏像。この寺の縁起書によれば、南都北嶺の旧仏教側の迫害に遭い、念仏停止令による1207（承元1）年の承元の法難で讃岐に流罪となる法然上人が、流される途中この地に立ち寄り、脇浜の庄屋であった富松右衛門の所に滞在した。同年12月、赦免となり讃岐からの帰途再びこの地を訪れた法然に松右衛門は深く帰依し、遂には仏門に入り法入という名を授かり、翌1208（承元2）年10月頃に自宅を寺として阿弥陀寺と称し開基したという。この時、法入は脇浜の海から霊像を一体引き上げた。その像の姿が、顔の形は阿弥陀如来、身体は勢至・観音の両菩薩という珍しいものであり、法然の勧めでこの仏像をこの寺の本尊にしたというが、それが現在本堂に安置されている阿弥陀如来・勢至菩薩・観音菩薩の三身一体の本尊だと伝える。

かつて、寺の西200㍍の浜に「法然松」といわれる三本の枝に分かれる老松があった。法然が讃岐配流の途中に立ち寄った時、松右衛門の懇願で上人自ら青松三株を一束にして浜の砂上に栽えたと伝える。山号の栽松山はここから来ているという。その後、この松が大きく育ち、一本の根から三方に枝がのびまるで臥竜のように見えたと言われる。この松はその後数百年の間に二枝は枯木となり、一枝だけが茂っていたという。安永年間（1772～80）にその枯れ木を用いて法然上人の尊像を彫刻し、それが今本堂に安置されている法然像（圓光大師像）だと言われている。「摂津名所図会」（1796年）によれば、結局松は枯れてしまい、株が三丈だけ残り、そばに植え継ぎの松があるとい、同書に描かれている法然松は、その二



四代目法然松と法然松の碑

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

阿弥陀寺（あみだじ） 脇浜町2丁目

代目の松である。二代目も大正時代に枯れ、三代目の松が植えられたがそれも1980（昭和55）年頃枯れ、現在では四代目の松が「法然松」の碑とともに境内にある。

ところで、この寺には「松風」と呼ばれる秘蔵の鉦がある。法然上人が法入に授けた鉦として伝えられており、法入終焉の時、この鉦をたたいて念仏を唱えていると、六甲山の北側・山田村の村人がその鉦の音を聞き、その音をたよりに山越えをして阿弥陀寺にやってきたと言われている。そのため、この鉦を「山越えの鉦」とも呼ぶようになったという。

なお、この寺もとの本堂は、近松門左衛門の「心中天の網島」の舞台となった大阪の大長寺を明治の頃に移築したらしいといわれているが、移築のはっきりした年代はわからなくなってしまったという。第二次大戦の戦火を免れたこのもとの本堂は、残念ながら阪神・淡路大震災で全壊してしまった。震災で倒壊した本堂も、2004（平成16）年5月に新しい本堂が完成、落慶法要が行われた。



三身一体の本尊



山越之鉦

著者提供 1994 撮影

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著